

2021年9月14日放送

新型コロナウイルス感染症と子どもたちの生活

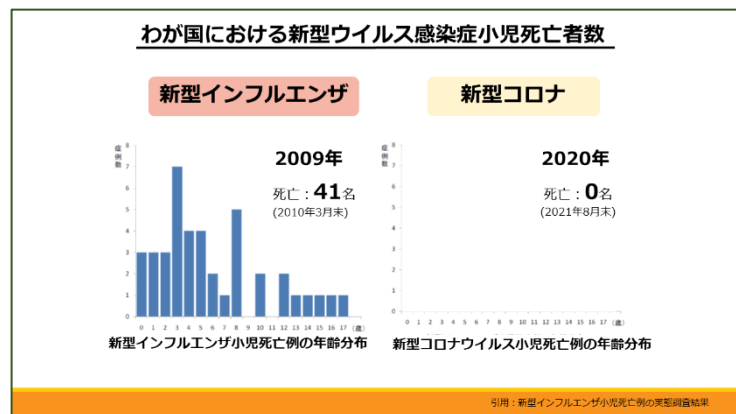
富山大学大学院 小児科
講師 種市 尋宙

<新型コロナウイルス感染症との対峙>

われわれが新型コロナウイルス感染症に対峙するのは、今回が初めてではありません。2009年に新型インフルエンザウイルスが流行し、短い期間に0歳から17歳まで41名の子どもたちの命が奪われました。小児医療におけるインフルエンザの狂暴性は周知の事実ですが、それに比較して現在問題となっている新型コロナウイルスはどうでしょうか。

2020年はじめから2021年8月末現在まで、いまだにわが国における10歳代までの死亡事例はゼロです。これは奇跡のようにも感じます。一般に上気道炎程度を起こすような他のウイルスでも時に小児が死亡することを経験します。それがウイルス感染症であり、それが小児医療でした。2021年5月に報告された海外の論文においても、英国、ドイツ、フランス、スペイン、イタリアといった感染が蔓延しているヨーロッパの国々においても10歳未満の子どもたちの死亡者数は7~9人と一桁にとどまっています。

このウイルスを正しく恐れるとは何なのか、様々な視点があると感じます。一つ明確に言えることは、大人と子どもは様々な点で異なり、同様の感染対策を実施することに疑問を持って臨まなくてはならないということだと思います。



<過剰感染対策の弊害>

2020年3月の全国一斉休校は約3か月に及ぶ子どもたちの自粛生活を大人が実施しました。感染対策としてはメリットもあるかもしれませんが、当然デメリットもあります。突然の休校は、各家庭が対応できず、共働きが普通になっている現代において、子どもたちを預ける先がなく、小さなこどもだけで留守番をさせるといったことが起きます。安全神話がまかり通るわが国ですが、小さな子どもたちを一人家にいさせることの危険性について、もう少し問題として考えないと、いけないのではないのでしょうか。事故や事件が発生する可能性は否定できません。無理に仕事を休む保護者にも当然ストレスがかかり、それが子どもたちに向けられてしまう状況も起こります。行き過ぎると虐待となってしまうこともあるでしょう。さらにこどもの貧困についても大きな問題として存在し、そのような子どもたちから給食を止めてしまうことがどのような結果をもたらすか、容易に想像がつかます。感染に怯える大人たちは子どもたちから公園の遊具を取り上げ、少しでもマスクがずれていたら怒鳴るという状況も見られました。自粛生活が長引くことで子どもたちの遊び場はなくなり、テレビ、ゲーム、インターネットなどで過ごす時間が増え、様々な健康被害が出現します。さいたるものが睡眠障害、運動不足による肥満ではないのでしょうか。

また、この社会状況における子どもたちの心は不安定となり、多くの心身症が発症しています。とくに摂食障害は国内のみならず世界的にも大きく増加しています。

過剰感染対策で子どもたちが背負うリスク

<ul style="list-style-type: none">・事故のリスク 家庭内では留守番に伴って熱傷、溺水等 屋外でも日中の交通外傷・虐待のリスク 家庭内の精神的負荷が増加し、 虐待のリスクが高まる・こどもの貧困 給食・子ども食堂の中止による弊害・事件のリスク 大人の目が届かない状況でのこどもの 留守番のリスク、SNSを通じた犯罪	<ul style="list-style-type: none">・精神的負荷 大人たちの不安、不満、混乱あり 心身症の発症、増悪リスク・メディアリスク SNS、ゲーム、テレビ、インターネット メディア暴露の増強とその健康被害・生活リズムの変調 運動不足による肥満増加 睡眠不足・学習の遅れ 較差拡大、興味の喪失
---	--

<教育と医療の連携>

不安と混乱の中、2020年5月の学校再開前に富山市では小児科医と教育委員会が手を組み、感染対策を行いつつ子どもたちの生活を守る取り組みを行ってきました。

一斉休校中の子どもたちの変化を外来診療で感じていた小児科医と、これまでとは異なった難しい感染対策を求められる教育委員会の意向が一致し、連携することになりました。

発足当時はまだ医学的な事実というものがほとんどなく、医療側からは最新の医学的知見を随時提供し、各学校の状況に合わせてどのように適応させていくかを検討する場としました。すでに全国各地で見られはじめていたフェイスシールド着用や机ごとのシールドなど、過

富山市立学校新型コロナウイルス感染症 対策検討会議の目的

- ▶ 児童生徒等が安心して学び、心身共に健康に学校生活を送ることができる環境の提供
- ▶ 最新の医学的知見の共有と学校の立場の相互理解
- ▶ 過剰感染対策を防止する
- ▶ 偏見、差別を防止する

子どもたちの日常を取り戻す

2020年5月26日 第一回対策検討会議スライド

剰な感染対策は医学的視点で不要と判断していました。また、陽性者の偏見差別を防止することも重要なミッションとしました。

この会議の大きな特徴は、安全を担保しつつ、感染対策をどう緩和できるかを考える場であったという点です。本検討会議の目指す方向性は、「子どもたちの日常を取り戻す」だったのです。大人の世界ではしきりに新しい生活様式が謳われていましたが、子どもたちは違うという明確な思いがわれわれにはありました。

<子どもたちの日常を取り戻す>

この1年以上の間で歩んできた道のりは決して平坦ではなく、大小様々な障壁もあり、感染者増加に伴って、社会状況が不安定になることも何度もありました。その度に保護者も学校現場も動揺し、強い風当りを感じることもありましたが、教育委員会や学校側と相互に意見を交わし、バランスを保つべく継続して対策を打ち出していました。

子どもたちにとってのリスクは決して感染症だけではありません。学校生活は様々なリスクと隣り合わせであり、熱中症と感染症を比較した場合、登下校時、運動時はマスクを外すという指示を早々に出しました。また、当初は感染した児童の学校名は公表する方針となっておりましたが、約8割という多くのケースがクラスター化せず、1名のみのもので単独感染で終わることがすでに知られており、学校名を公表することが感染拡大予防に大きく寄与することはなく、逆に誹謗中傷、周囲の人々の不安増長を引き起こすという負の作用の方が強く、子どもたちの生活を侵害する状況となっていました。それゆえ学校名非公表についても、討議を重ね、富山市では2020年7月に非公表の方針といたしました。懸念された社会からの非難もなく、地域のメディア側も受け入れてくれました。

そして、最も大きな議論となったのが、合唱コンクールです。当初、医

富山市立学校新型コロナウイルス感染症対策検討会議のあゆみ

2020/6月： 登下校時、運動時は原則的に**マスクを外す**ことを推奨

2020/7月： **トイレ掃除、うがい・歯磨き**は従来通りへ

2020/7月： 感染児童、教師の**学校名非公表**に修正

2020/10月： マスク無しの中学校**合唱コンクール開催**

2020/12月： 冬の感染対策指針（休憩時間ごとの換気など）

2021/3月： 卒業式（**マスク無し**の入場、証書授与、合唱など）

学的視点としては、合唱は感染リスクのある行事であり、マスクは必要であると考えていました。しかし、教育サイドから、合唱とはなんたるか、そしてただ歌を歌うだけの行事ではなく、子どもたちが自分で物事を決め、クラスが一つにまとまり、それを発表する場が合唱コンクールであり、重要な教育の一環であると、熱意をもって説明していただきました。その合唱をなんとかマスクを外してやらせてあげられないか、と依頼があったわけです。再度、医療側で検討し、これまでの合唱クラスターを分析したところ、当初認めていた合唱クラスターは、3密状況における合唱パターンが多く、また多くのケースで休憩時間に飲食を伴っていました。これらのことから、コンクール開催時の地域の感染状況を考慮しつつ、距離、換気を重視した3密を重ねない感染対策の方針とし、合唱時のマスクは外して行うという合唱指針を作成しました。多くの中学校がそ

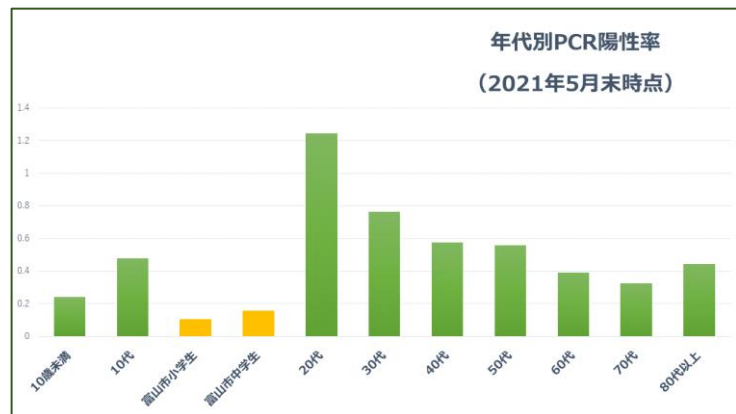
の合唱指針に基づいてコンクールを開催し、幸いクラスターは1例も発生しておりません。その後、その指針に基づいて卒業式、入学式も合唱は行っています。幸い方針を変えるような事態は起こってはいませんが、引き続き注意して対応していく方針です。

<学校は危険なのか>

学校は密集しており、社会からは感染リスクの高い場面であると認識されています。事実、インフルエンザや感染性腸炎などは学校という場で感染が拡大し、各家庭にその感染が広がります。それゆえ、以前より学校という場は感染対策については学びを続け、対策を続けてきた場でもあると言えます。

今回の新型コロナウイルス感染症について、学校再開後1年が経過したところで、わが国における各年代のPCR陽性率と富山市の小学生、中学生のPCR陽性率を比較しました。すると驚くことに、学校環境の小学生、中学生の方がPCR陽性率が低かったのです。全国的に評価しても学校環境下にある小学生、中学生はPCR陽性率が低い傾向がありました。

これは一体何を意味するのでしょうか。学校の感染対策が強化されていることが関係しているのかもしれませんが、富山市はどちらかというと感染対策緩和に向かってい



ましたが、他の地域の陽性率と大きな違いはありませんでした。子どもたち自身が感染しづらい、拡げづらいという特性があるのかもしれませんが、そのあたりは今後の解析を待たなくては、まだどちらとも言い切ることは難しいと思われます。しかし、その結果が出るまで強い感染対策を子どもたちに強いるのかといえば、それは違うと思います。子どもたちはこの感染症に対しては、重症度も高くなく、ちょっとした感染拡大、クラスター発生を恐れて前に進まないことが逆に危険であるという可能性もわれわれ大人は考えなくてははいけません。

すでにこの1年でそれが明らかになってきています。

<コロナ禍の自殺>

昨年度、1年間で小中高校生の自殺者は前年比で100人も増加しています。新型コロナウイルス感染症による小児の死亡者はゼロです。明らかに子どもたちにとっては、社会のバランスが崩れているとデータが示しています。自殺理由が全て感染症関連であったとは言いませんが、大きく関わっていたことは間違いありません。成人でもずっと減少傾向であった数字が昨年度は一転して上昇となりました。この部分を軽視し、感染対策一辺倒の方策を続けることは危険です。少

なくとも小児の世界ではアンバランスが起きています。われわれ大人が見間違っている可能性も考えなくてははいけません。

<感染対策はバランス>

感染対策と教育について、すべてはバランスなのです。ゼロか100かの世界ではないため、不安の中でも前に進んでいくしかありません。立ち止まれば安全かと言えばそうではないということが自殺者数一つをとってもすでに見えています。前に進むためには、議論の中心に子どもを置いて考えることが重要だと思っています。大人の都合、大人の不安、大人の勝手な考え方を入れ込まない

事が重要です。そうすることでおのずと子どもたちが進むべき方向性が見えてくるのではないのでしょうか。この先もたびたび起こるであろう子どもと変異株の関係性の問題、子どもへのワクチン接種の是非など、課題がまだまだあります。子どもたちにとっての感染対策として、何が正しいことなのか、全国の小児科医が引き続き議論しなくてははいけないと考えております。



「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>